

大津波を生き切った子どもたち—防災文化をどう創る

渡邊 真龍（元釜石市立釜石小学校 校長）

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災において、岩手県釜石市の小中学生約 3 千名は、発災前の数年間に群馬大学片田教授の指導・助言を受け「市・地教委・学校」で取り組んだ子供たちに「防災文化」を育てることを目標とした研究により生存率 99.8%を達成した。

このことは、マスコミを通じて「釜石の奇跡」と報じられたが、大津波を生き切った児童生徒は「実績（学習の成果）です」と胸を張る。

子供たちに「防災文化（避難は当たり前）」を育てるという視点は、「正常化の偏見」「集団同調バイアス」等の大人の防災意識を低下させる心理学的原因を克服するために片田教授より示された。自然を享受しつつも、いざ発災時には自己の判断で適切に避難行動をとれる子どもが育てば、その子供たちが大人になり親となって次世代に防災文化は伝承される。

この釜石の防災教育の概要は以下である。

- 1 防災教育の、前提は「郷土愛」・「地域の先人（特に防災や復興等）への畏敬の念」。
- 2 「津波てんでんこ」の教えを、家族間でしっかり共有する。
「必ず家族は、それぞれの判断で安全な場所へ避難している」という信頼関係を持っていることが重要である。過去の津波で家族等を捜しに行ったことで、多くの犠牲者を繰り返し出してきた三陸沿岸の智恵であり、「自分の命は自分で守る」という共倒れを防ぐ智恵である。
- 3 防災教育の授業は、「自ら考え判断する」工夫をする。
 - ①市内全小中の教員の研究組織により「釜石市津波防災教育のための手引き」を作成。
 - ②「津波避難三原則」の理解と行動化の徹底。
 - ア 想定にとらわれるな（ハザードマップはあくまでも想定であり鵜呑みにしない）
 - イ 最善を尽くせ（そのとき、その場で、自分ができる最善のことをする）
 - ウ 率先避難者たれ（まず、自分が真っ先に避難する）
 - ③各校での計画的で工夫された防災授業（釜石小学校の例）
 - ア 親子防災マップ作り、ジャンボ防災マップ作成、防災マップ発表会
 - イ 下校時避難訓練（市の協力を得て「津波警報」を流し地域・保護者と合同訓練）
 - ウ 3の①の「手引き」を活用しての「自ら考えより良い避難行動を目指す」授業

3.11. あの日釜石小学校の児童は殆どが下校していたが、自分だけでなく、体の不自由な友人を背負い、逃げない祖父母を泣きながら説得して連れ出し避難所等へ向かった。更には自分たちの真剣な避難行動を通して地域の人たちの避難行動を誘発し命を救った。

釜石小学校では 700 人を受け入れ避難所を開設したが、1 時間で運営組織図（市・町内会・学校の役割分担）が完成した。常日頃から、学校・地域等の連携が重要である。

津波被害に落ち込んでいる中で「言葉の力」を実感した釜石小学校の避難所生活だった。お年寄りの「体育館に掲示されている校歌の歌詞（作詞 井上ひさし）が勇気をくれるので全員で歌いたい」との提案で、避難所を閉じる迄の5ヶ月間、毎朝、歌われた。

防災教育で身につけたものを発災時の適切な避難行動に結びつけるには「スイッチ」を入れるものが必要であり、それは「自己肯定感」だと考える。自己肯定感の高い子どもは、「他の命を救う為には、その前提として自分の命を守りきらねばねらない」と考えるからである。

釜石小学校校歌 「いきいき生きる」

作詞 井上 ひさし

作曲 宇野 誠一郎

(一)

いきいき生きる	いきいき生きる
ひとりで立って	まっすぐ生きる
困ったときは	目をあげて
星を目あてに	まっすぐ生きる
息あるうちは	いきいき生きる

(二)

はっきり話す	はっきり話す
びくびくせずに	はっきり話す
困ったときは	あわてずに
人間について	よく考える
考えたなら	はっきり話す

(三)

しっかりつかむ	しっかりつかむ
まことの智慧を	しっかりつかむ
困ったときは	手をだして
ともだちの手を	しっかりつかむ
手と手をつないで	しっかり生きる